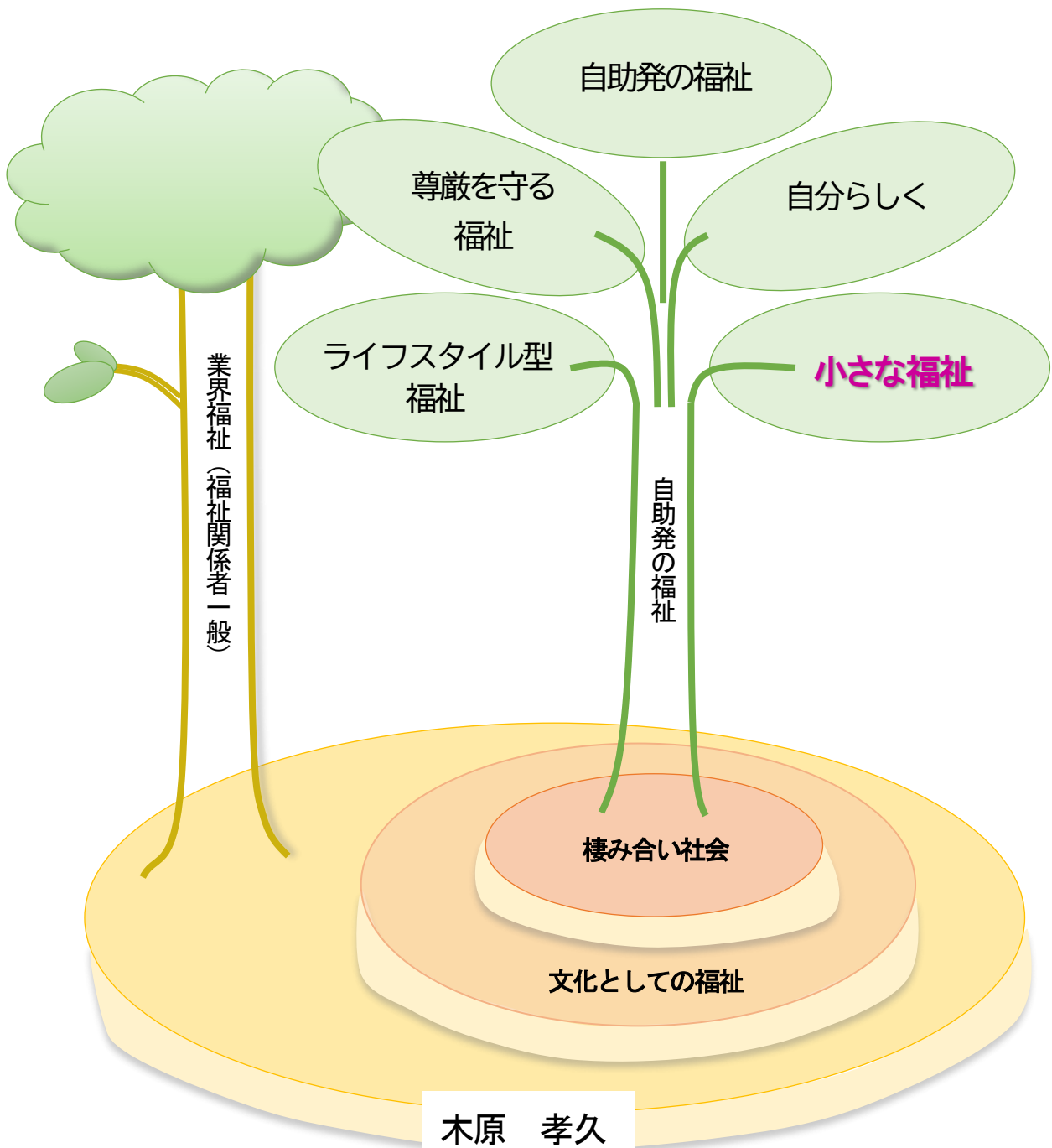


## 第4章

# 小さな福祉をつくろう



# 目次

---

1. ご近所福祉の基礎知識／3
2. ご近所規模（50世帯）の町内会があった／10
3. 日本は元々50世帯が基準のsmall社会／15
4. 誰もが豊かに生きられる「ご近所」／18
5. small活動のあり方／28
6. ご近所の推進体制もsmall化／30
7. 「small感覚」を磨こう／35
8. 50世帯の町内会を持つ地区から始める／37

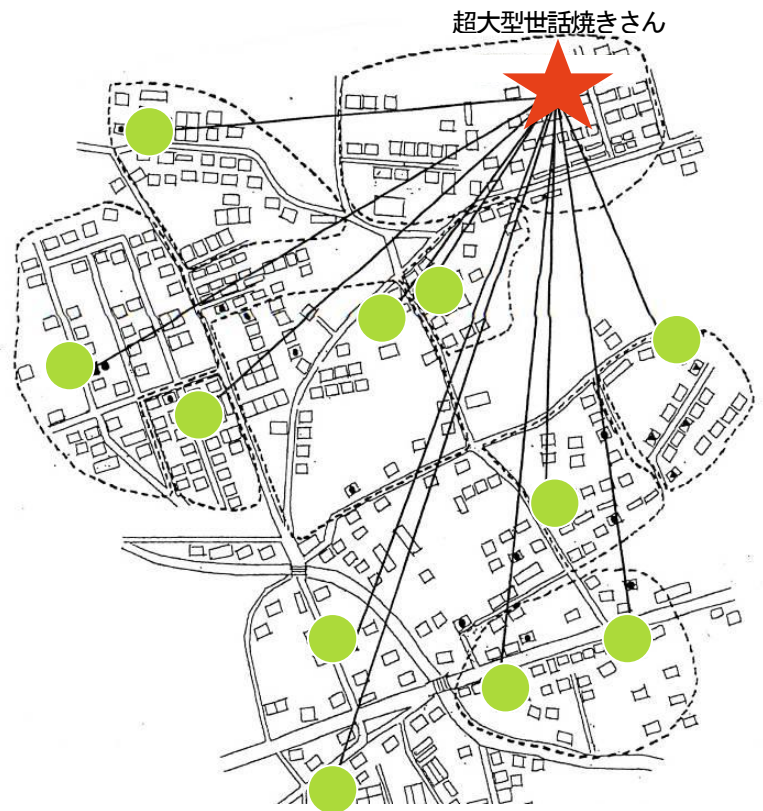
# 1.ご近所福祉の基礎知識

## (1)地域には4つ目の層があった

介護保険が行き詰まり、「要支援や要介護の人の生活支援は地域で」と国が方針を変更し、地域の中の第1層と第2層に生活支援コーディネーターを配置した。

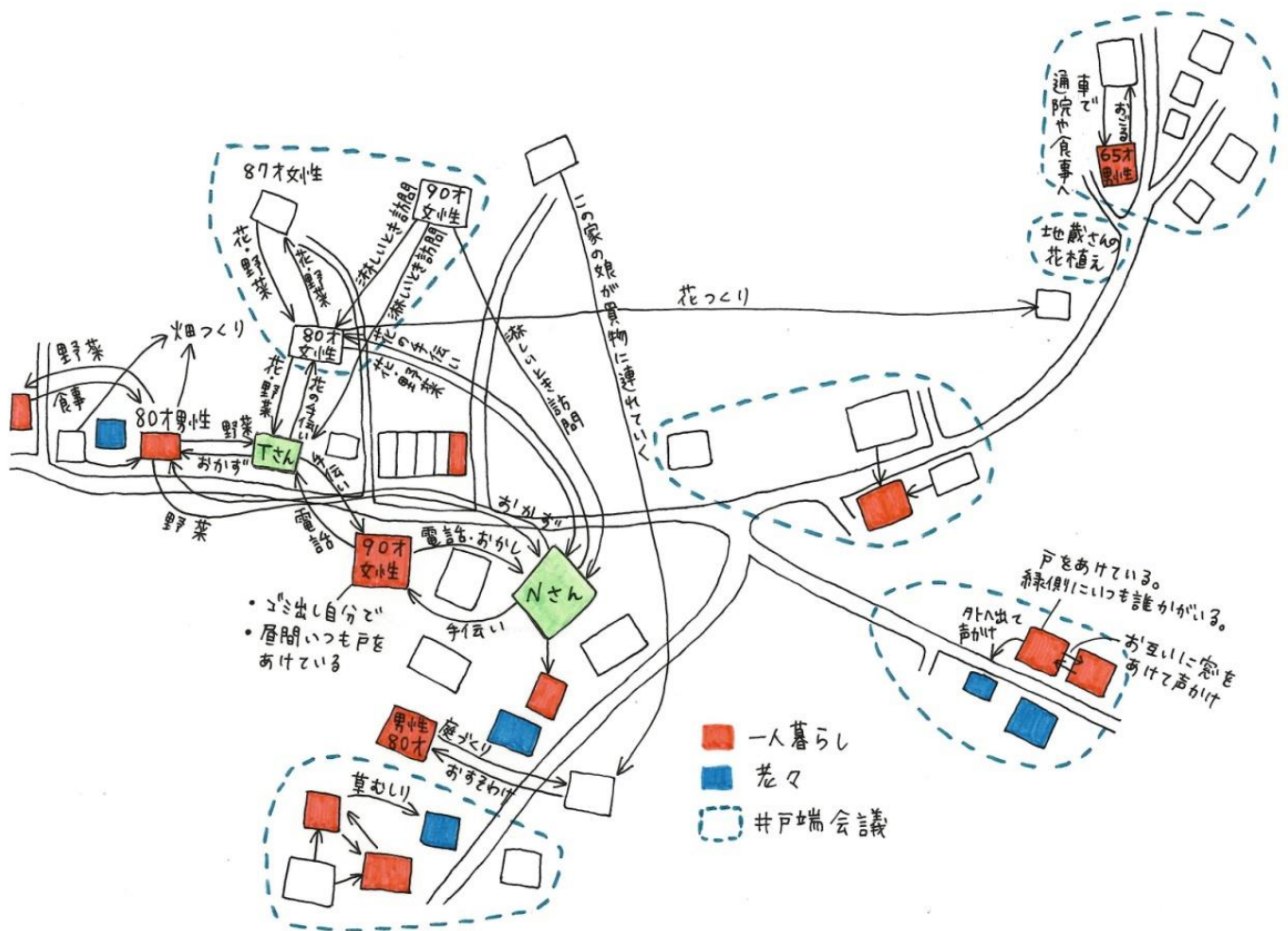
第1層は市町村域、第2層は校区。その次に自治区の第3層があるが、その自治区の次に、もう1つの層があった。

このマップは数百世帯の自治区。ここで活躍中の世話焼きさんに聞いてみた。「こんなに広い地域の福祉問題がよくわかりますね」。すると彼女は、「私が見えるのは足元だけ」と点線で囲った。50世帯ぐらいだ。その他の地区は、それぞれ問題が見える人を探して、アンテナ役になってもらっていると。



## (2)ここを「ご近所」と呼ぶことにしよう

全国で支え合いマップづくり（住民の助け合いを住宅地図に乗せる）をしてきたが、住民は、およそ50世帯で何となくまとまり、助け合っていることが判った。これがいわゆる「顔が見える」範囲である。これ以上広いと駄目、という「助け合いの限界圏域」。ここが第4層で、「ご近所」と呼ぶことにした。



### ① 支え合いマップで浮かび上がるご近所での助け合い

支え合いマップを作ると、人々はご近所で助け合っていることがわかる。上のマップを見ると、以下のようなことが見えてくる。

- ① 2人の大型世話焼きさん（■）がご近所福祉のキーマンになっている。
- ② そこで食事サービス（おすそわけ）や送迎サービス、つまり生活支援もやっているのではないか。しかもそのほとんどは双方向で、「お返し」がなされている。まさに「助け合い」である。それだけではない。
- ③ 要援護者である一人暮らし高齢者も、いつも戸を開けている、外へ向かって声を掛けるなど、見守られ努力をしている。一人暮らし同士が見守り合ってもいる。これが自助努力だ。

## ②ご近所は助け合いにベストの圏域

ご近所は伊達にあるのではない。長年マップ作りをしてきてわかってきたことだが、人々は、「なんとなく」だが、ここがいわゆる助け合いにベストの圏域だと思っている。自治区では（広すぎて）助け合いはできないのだ。

## (2)要援護者はご近所で生活し、ここからニーズを発信

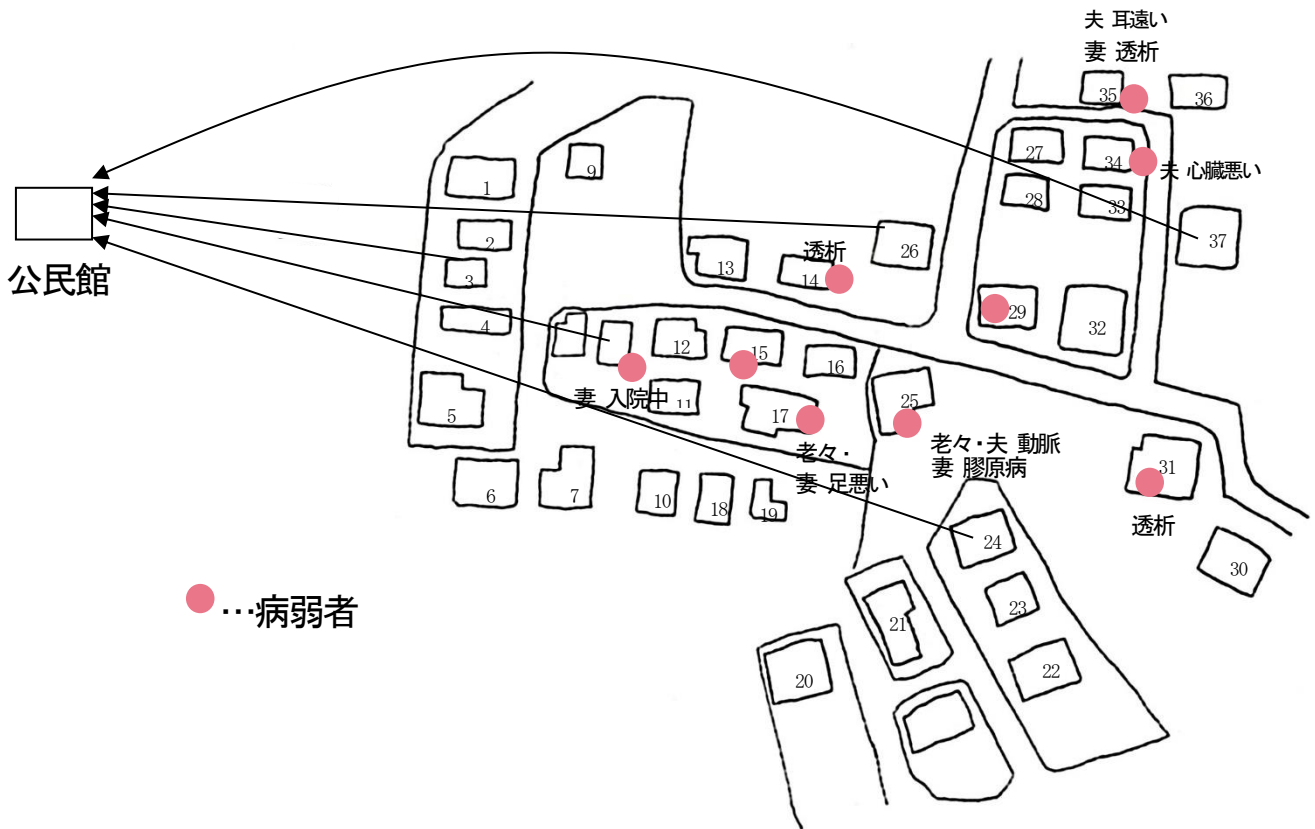
この「ご近所」で、要援護者も生活していて、自立生活をするためにご近所さんの助けを得ている。彼らはご近所から出られない—その心身の状況から、ご近所外に出かけるのが辛いのだ。

### ①病弱者は公民館には行っていなかった

次のマップを見ていただきたい。ご近所には要介護者だけでなく、病弱者もいる。彼らはこの地区から500メートルほど離れた公民館（マップではすぐ近くに書いてあるが）には行っていないことがわかった。要援護状態だから、行こうにも行けないのだ。ご近所の人たちはこのことを承知していた。承知した上で、その公民館でサロンや趣味活動などをしていた。

### ②だから「ご近所福祉」の充実を最優先に

要援護者は、ご近所で自立した生活をしたいと言っている。それを支えるのが福祉の第一の役割だとしたら、まずご近所福祉を充実させねばならないのだ。自立生活に不可欠なのが、足元の人たちが日常的に見守ってくれたり、困り事に応じてくれることだろう。それを今もある程度はご近所さんがやってくれている。



### ③ニーズはご近所から発信される

福祉関係者が探している福祉ニーズは、ご近所から発信される。その電波は極めて弱々しく、また届く範囲が狭い。そのニーズや実態を掴みたければ、ご近所まで足を運ばねばならない。しかもニーズは見えにくい。見える人も限られている。

関係者がご近所を無視して福祉をつくれるのは、「ニーズは、サービスを用意すれば自然と近寄ってくるはずだ」と単純に考えているからだ。だが実際はそうならない。生活支援関連のサービスを担っているNPOのリーダーたちに悩みを聞いたら、「ニーズがやってこない」であった。

### (3)世話焼きさんもお近所にいる

#### ①足元のご近所なら困っている人も見えやすい

ご近所には当事者がいるが、その人たちに関わる世話焼きさんも、主にご近所で活動している。上層の自治区は数百世帯だから、困っている人が見えない。足元のご近所なら見えやすいし、当事者もニーズを発信している。

4ページのマップでも、■印の2人が大型世話焼きさんで、その他に、おすそ分けをしている人が数名、送迎をしている人が2人いて、この人たちは中型世話焼きさん。ご近所では当事者（要援護者）と世話焼きさんが、いわば相思相愛の関係になっている。

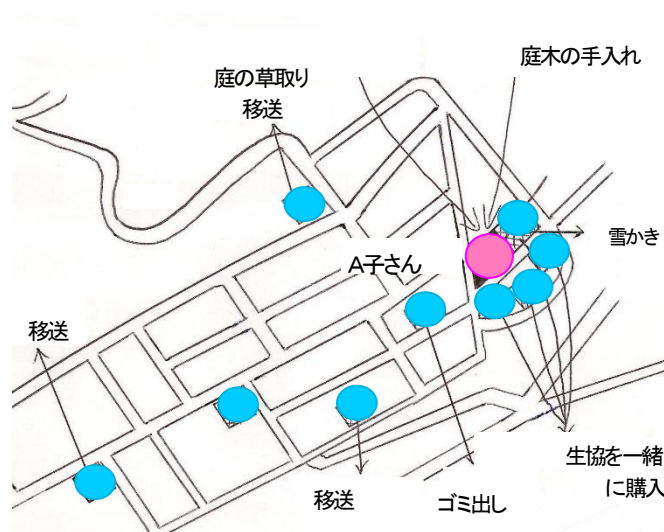
#### (4)「ご近所」とは、こんな世界

ご近所では、独特の住民の流儀で助け合いが行われている。これを知らなくては、住民とうまく協働してご近所福祉をつくっていくことはできない。

##### ①当事者が主役

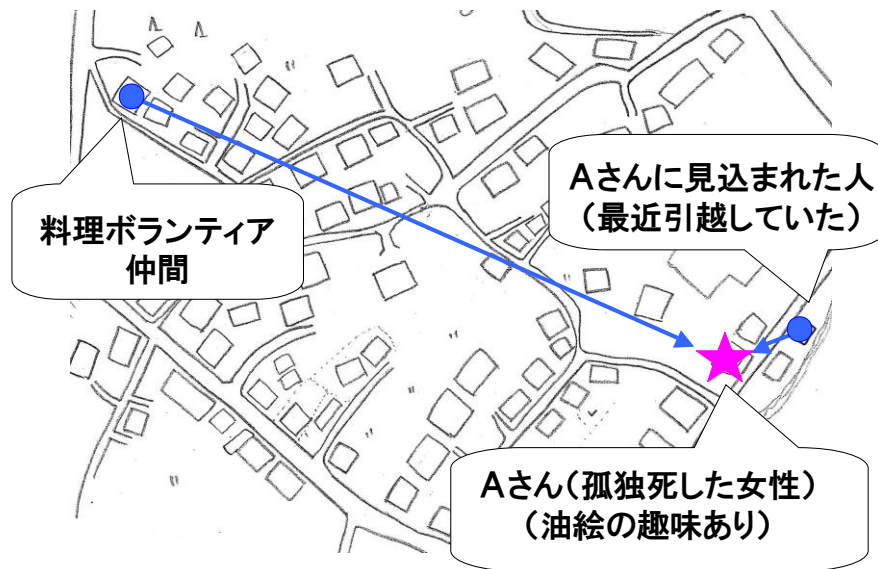
「当事者主役」は、地域全域で貫かれている原則だが、ご近所では特に顕著だ。4ページのマップを見ても、当事者が自分の支援者を選択し、活用している。一人暮らしの人も自らの安全を保持するための努力をしている。

下のマップ。老々で共に要介護という大変な家だが、奥さん（A子さん）が「助けられ上手さん」で、周りの人にあれこれお願いしていた。あなたはゴミ出しを、あなたは庭木の手入れを、あなたはバス停まで私を送ってねというように。



引きこもりの人はどうなのか。次ページのマップは、死後2週間で発見された一人

暮らし女性。マップ作りの際、はじめは「誰も見守っていなかったから亡くなった」と町内会役員は言っていたが、最終的には女性と関わりのあった人が2人見つかった。右側の人には本人が「何かあったらお願いね」と言っていたそうだ。



## ②担い手と受け手という区別をしない

福祉とは担い手が受け手にサービスをすることだという常識は、ご近所では通用しない。ここでは受け手が容易に担い手になったり、担い手同士が関わり合ったりする。

## ③私的な関係

一人暮らしの高齢女性を、隣家の男性が病院まで車で送ってあげている。それを知った人が私にこうやってきた。「こんなことをやっていると、もし事故が起きたらどうするんでしょうね」。この質問を、移送している男性にぶついたら、何と云うか。「そんなうるさいことを言うなら、やめた」と、引いてしまうだろう。

もしこれが自治会の福祉サービスの一環で行われたらどうなるか。まず事業の趣意書をまとめる。主催者や担当部署、担い手と受け手の関係のあり方や、経費負担、事故が起きた時の保証などを規約に盛り込むだろう。

前者は「私的な営み」と考えたらどうか。双方の自由意思と信頼関係、そして頼ん



だ方の責任において、実践されている。だから規約云々は関係ない。「もし事故が起きたら」と言い出す人は「公的な営み」という別の論理を持ち出したことになる。

個人の意思を超えて、住民全体が共同意思で、組織的に福祉の営みを実施する。そこに個人的な事情は差し挟まず、ありうる事態をすべて規約として設定し、全員がそれに従う。

#### ④相性が合わないと駄目

ご近所では、相性が絶対的に重要である。相性が合わない人同士が助け合いをするなんて、ありえないのだ。ところが公共的営みの中では、相性など考慮されない。

#### ⑤1対1のやり取り

私たちが福祉活動をする時は大抵、相手を特定の問題に絞り込み、該当する要援護者を1か所に集めて、一律（十把ひとからげ）のサービスをする。こういうのが公的な営みであろう。私的な営みだと、特定の相手（1人）と特定問題についての善意のやり取りをする。2人にしか当てはまらないテーマであり、やり方である。

#### ⑥双方向

ご近所では、いわゆる「サービス」という考え方はない。ここでは原則として善意のやり取りは双方向でなければならない。一方が相手に「おすそ分け」をすると、必ず「お返し」がある。食事のおすそ分けをすると、畑でとれた野菜のお返しがなされる。病院まで送迎をしてあげると、帰りのレストランでの食事は送迎してもらった方が払う、というように。

#### ⑦実力主義（天性主義）

足元から福祉ニーズを掘り起こし、それに関わるのは非常に難しいし、それなりの資質がなければつとまらない。だから住民は、その点では妥協はしていない。ご近所

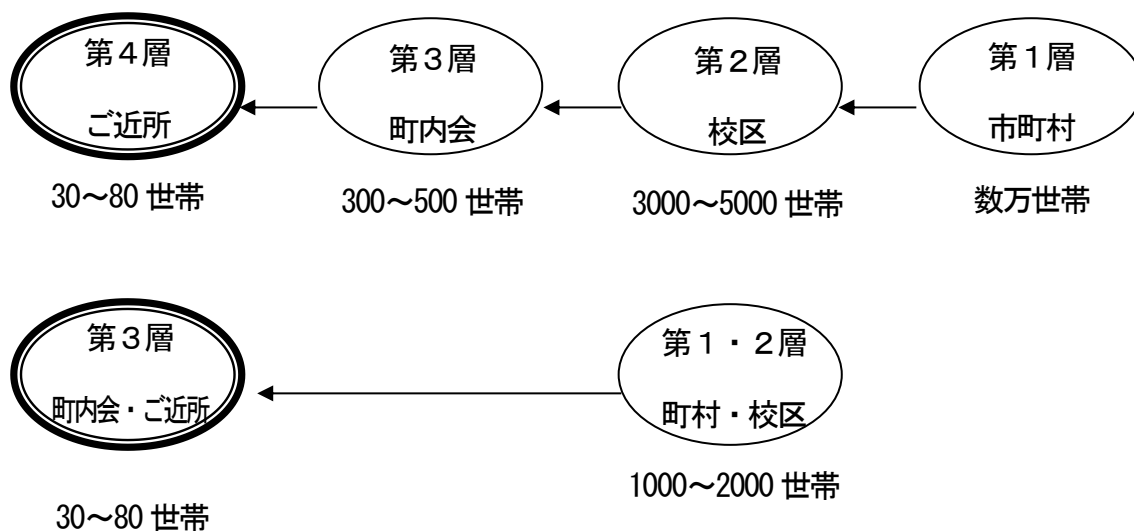
には、人を助ける天性の資質を備えた世話焼きさんが複数いて、緩やかに連携してご近所福祉を実践している。

## 2. ご近所規模 (50 世帯) の町内会があった

### (1) 層がそれぞれ 1 段階ずれる

地域は4つの圏域に分けられる。第1層が市町村、第2層が校区、第3層が自治区だが、本研究所ではさらに、第4層がご近所と規定している。

ところが私がマップ作りを依頼されたある町内会は、第3層なのに、わずか50世帯。これは一般的なご近所(第4層)と同じ規模だ。しかも町村自体が千数百世帯で、一般的な校区に相当する。つまり、層が1段階ずれている。校区は事実上存在しない。校区と町村が同じなのだ。下の図の、上部が一般的な圏域図で、下部が今回紹介する圏域図である。



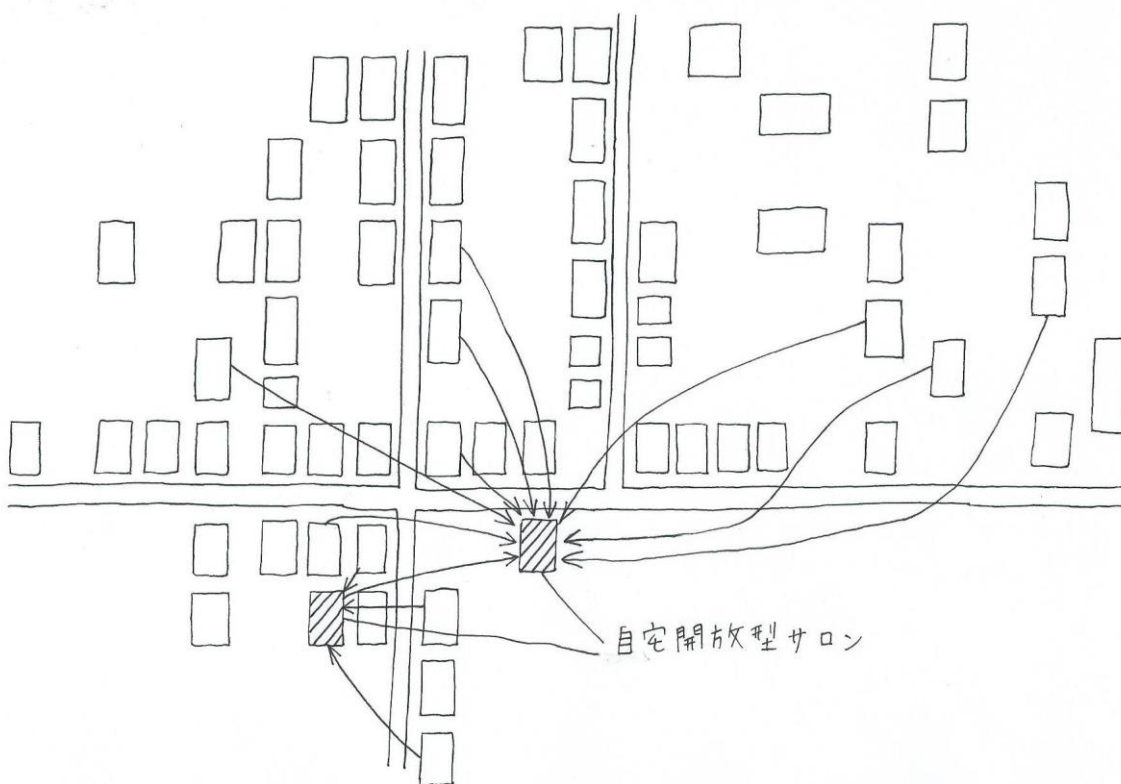
### (2) 「50世帯の町内会」の利点

マップづくりをしていて感じたのは、助け合いのまちをつくりたいとしたら、こういう規模の市町村(実質は校区程度)で、こういう規模の町内会(実質はご近所)であるべきではないか、ということであった。

## ①世話焼きさんが1人いれば、助け合いが始まる

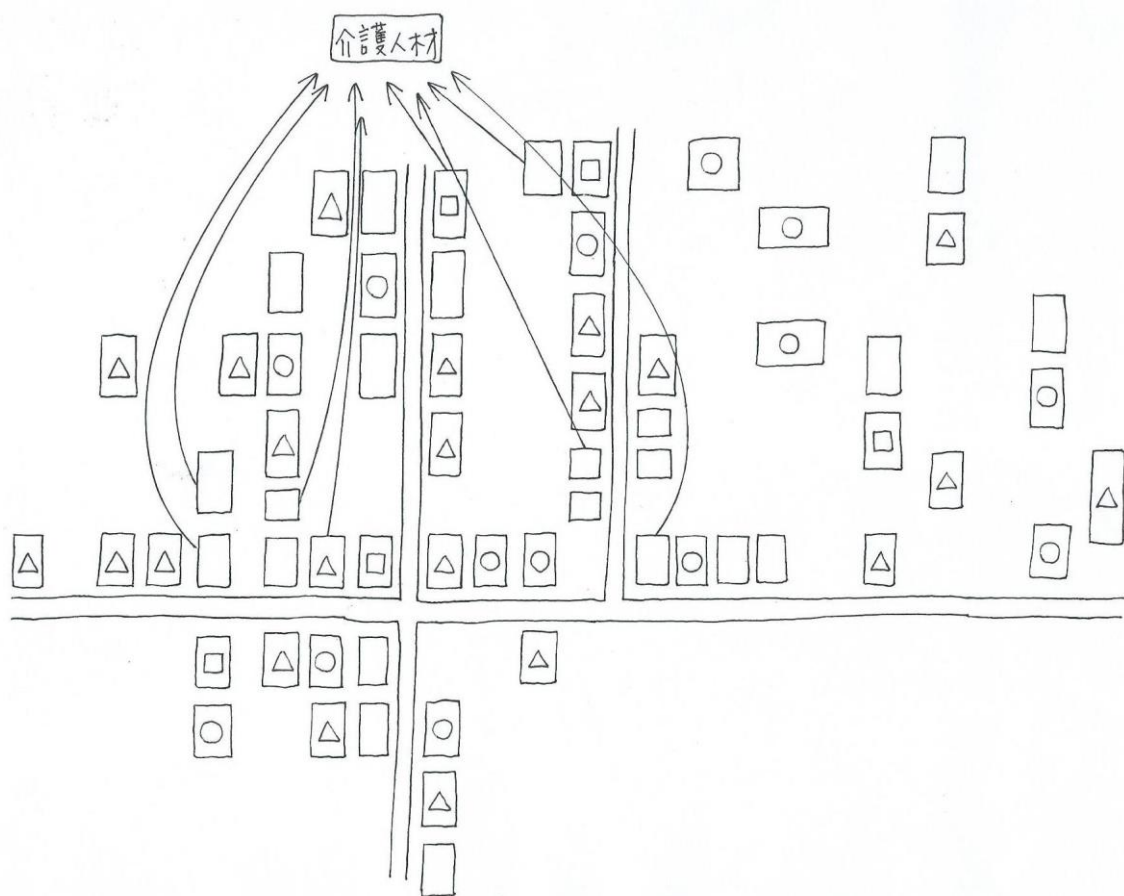
例えば、下のマップをご覧いただきたい。1人の世話焼きさんが自宅でサロンを開いている。集まる人の数も多いが、マップ作りで得られたこのご近所の様々な情報のほとんどは、この女性から聞き出したものである。

小さなご近所で、しかもそこが町内会という、事実上の行政組織だから、まとまりもいいし、世話焼きさんが1人いれば、助け合いが始まる。彼女も含めて、この町内の福祉を推進していこうという人が数名いる。



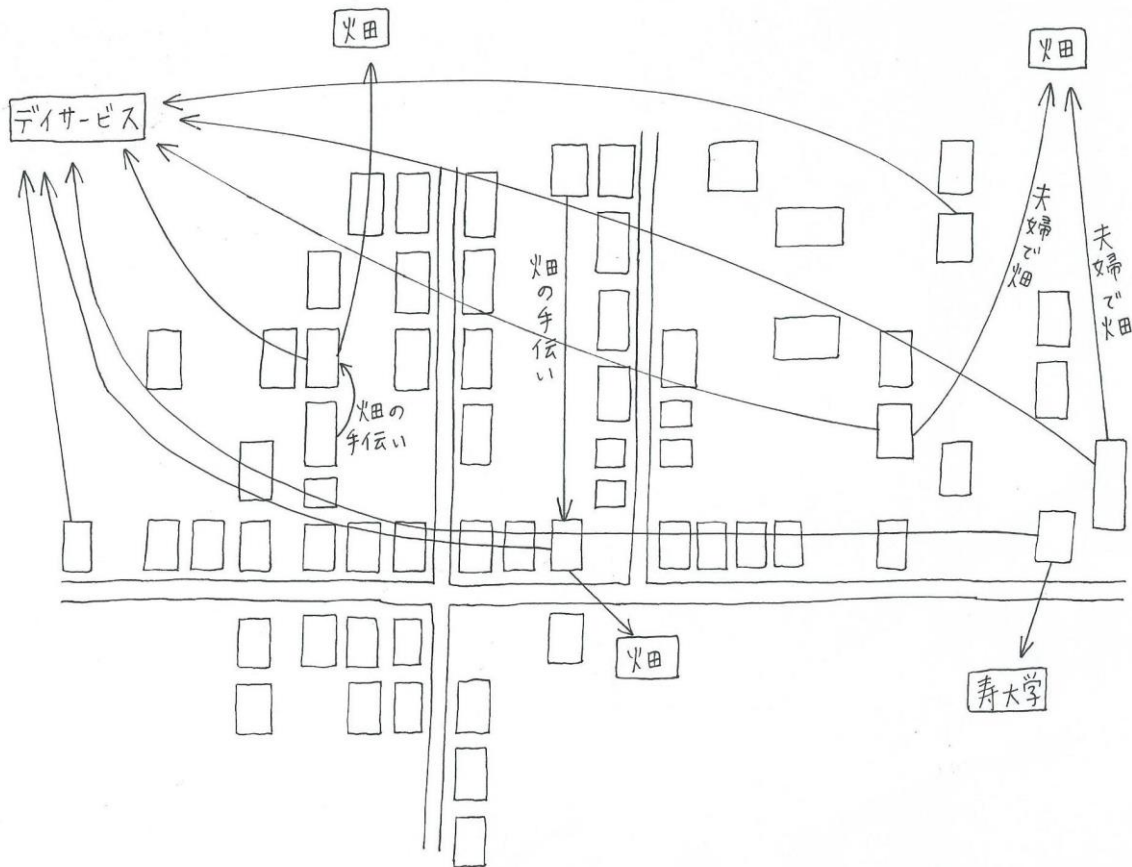
## ②介護人材が、わずか50世帯の中にこんなにたくさん

次のマップでは、介護人材が、わずか50世帯の中にこんなにたくさんいる。一般には、どこのご近所でマップを作っても、こういう人材は2、3人程度である。ところが小さな町村だから、相対的にこうした人材も多くなる。ヘルパーや保健師などの数は、世帯数に比例するというよりは、絶対数が決まっている部分もあるから、相対的に大きな市町よりも多くなる。



### ③デイサービス利用者が畑を楽しんでいる。それをご近所の人支援

次のマップでは、デイサービスを利用している人が、利用しない時に畑を楽しんでいて、それをご近所の人支援している。こういう行動は、他の市町では見当たらない。まとまりのいい町村である証拠かもしれない。行政サービスも充実している。というよりも、人口当たりのスタッフの数が、他の巨大市町よりも各段に多いのだから、当然と言えば当然だ。



### (3) 町内を 50 世帯ごとに区切り、助け合い圏域とする

#### ① 「スモール町内会」に何か名称をつけたい

そこで考えた。全国の福祉システムを、このやり方でやってみたらどうなるのか。まず町内会をおよそ 50 世帯ごとに区切り、1つの助け合い圏域とする。だがこれを「ご近所」と言うと、却って分かりにくくなる。「ご近所」という言葉は既に使い古されていて、今回我々が目指している助け合いのための圏域ということから離れていくからだ。

#### ② 「スモール町内会」を従来の町内会がバックアップ

そこで、新しい名称はつけられないだろうか。いわば「スモール町内会」だ。これらを従来の町内会がバックアップするという形になる。しかし今の町内会は、それほど明確に福祉をめざそうとはしていないから、ここにも新しい支援体制をつくる必要

がある。町内福祉委員会などをつくっている地域もあるから、それもいい。

それ以上に大事なのは、スモール町内会をしっかりバックアップできる人材が存在することである。私共は超大型世話焼きさんと言っている。大型世話焼きさんよりもっとスケールが大きく、傘下の複数の「スモール町内会」を後押しする力がある人。この人を探し出せば、実質的には町内福祉委員会も必要でなくなる。

### ③圏域のすべてをスモール化するとしたら…

今回マップ作りをした町村のあり方を一般化するとしたら、まず圏域のすべてをスモール化する。

#### ①社会の一単位を市町村にするのではなく、今の校区のかなり小さいもの、500世帯ぐらいにする。

今の町内会と同じである。僻地でなくても、この程度の校区はいくらでもある。この規模だと、住民同士もある程度は「顔が見える」。

#### ②この中に50世帯の「スモール町内会」が10個あることになる。

これなら、超大型世話焼きさんなら何とか掌握できる。スモール町内会があつて、しっかり助け合えば、その後ろの圏域は、超大型世話焼きさんが1人いれば足りる。超コンパクトな福祉コミュニティである。今の行政制度を変えることはない。後でも述べるように、表と裏の2つの社会が併存しているというあり方でも可能なのだ。

# 3.日本は元々50世帯が基準のsmall社会

## (1)50戸が1単位の縄文遺跡があった

毎日新聞の夕刊コラム「近事片々」に、ある縄文遺跡での出土品から古代の素朴な団らん風景が目に浮かび、豊かさとは何ぞやと考えた—そんな話があったが、ふと目を引いたのは、こんな一文だった。「(その縄文遺跡は)50戸ほどの集落だった」。

私共では、小地域福祉をすすめる上で、人々がまとまって暮らしている「ご近所」という単位を重視し、これを平均50戸(30戸~80戸程度)としている。

この50戸という数字は、どこかから知識として得たものではない。長年マップづくりを通して住民の支え合いの実態を分析してきた中で経験的に得られたものであり、「なぜ50戸なのか?」と聞かれても、実際にそうなのだと言えないのであった。

そんな中、冒頭の記事を目にして、この「50戸」という数字が日本人にとって何か意味を持つものなのか、ちょっと調べてみたくなった。

## ①古代の国郡里制の「里」は50戸だった

検索をかけてすぐに出てきたのは、こんな事実。古代日本の地方行政制度である国郡里制が定められたとき、その最小単位である「里」は、50戸だったのである。当時の1戸は、主に血縁関係にある平均20人の集団を指すものだったそう。

ウィキペディアに、「五十戸」(ごじっこ、さと)という項があった。それによると、五十戸という単位がまずつくられ、その後それを里と呼ぶようになったらしい。

制度として正式に定められた時期は議論が分かれるものの、「五十戸の始期は、資料で確認できる上限としては663年頃の天智天皇の時代であり、学説としては孝徳天皇の時代(646年から654年)と推測されている」と述べられている。そしてその後、715年の郷里制により、50戸の「里」は「郷」と呼ばれるようになったということである。

## ②中国の行政は100戸、住民は50戸

また、日本の律令制は中国をモデルにしているため、「里」を50戸と正式に定めたのは、中国の律令制の最小単位である「村」からきているという話も散見されるが、これもまたおもしろい。

中国には、租税徴収のために行政が人為的につくった「里」という単位もあったが、これは100戸。一方で、自然発生した集落単位である「村」は、50戸だったというのだ。

古代中国に関する多くの著作を持ち、明治大学名誉教授であった故・堀敏一氏による「魏晋南北朝および隋代の行政村と自然村」には、こうある。

「三国時代以後に出現した『村』とよばれる集落は、民間に自発的につくられた集落であって、国家の支配とは直接関係をもたなかった点で、純粹に自然村とよぶことができるであろう」。それが、50戸だったのだ。

## ③「既存宅地」の基準も「50戸を1つの集落規模」

「なぜ、集落は50戸でひとまとまりなのか？」—この疑問はまた、他の分野からも発信されていた。不動産業界である。

長野市にある「内藤事務所有限公司」の不動産鑑定士、内藤武美さんという方がブログに書かれていることによれば、長野県や長野市の市街化調整区域内の「既存宅地」に関する各規程は、いずれも「50戸をひとつの集落規模としている」という。この「50メートル以内の間隔で50程度の家がつながって建っていれば、そこはもともと人が住んでいた地域（集落）として認められる」という規定は、通称「50戸連たん」と呼ばれ、全国あちこちにあるそうだ。

この方は、「なぜ、1つの集落は50戸なのか？」と疑問に思い、県や市や町の担当者に聞いてみたが、だれも答えられる人はいなかったということである。



## (2)「裏町内会」という発想

### ①50世帯で独立した自治会を作ろうという動きがあった

埼玉県内で、ある町内会の特定の地区でマップを作ったのだが、その一部は濃密な助け合いをしていたが、隣接した50世帯が、ほとんど助け合いを実行している形跡がない。隣の地区に合流する気もない。聞いてみると、その50世帯で独立した自治会を作ろうという動きがあったという。やはり、住民はその50世帯でなんとなくまとまっているのだ。

### ②すでに自治会に所属しているが、それとは別と考えれば？

ならば、それを実行し、その50世帯の中で自治活動を行うようにすれば、助け合いの気運も生まれてくるのでないか。むしろその50世帯は、すでに自治会に所属しているが、それとは別につくってしまえばいい。それを公式に認められようとしなければいいのだ。

### ③裏町内会づくりがあった

住民は面白い発想を使っている。正式な町内会は、一応行政組織なので、反発しても仕方がない。そこで住民が考えたのが「裏町内会」である。例えば行政の息がかかったふれあいサロンが開かれているが、それに反発する人たちが同じご近所で別のサロンを開く。両者は併存しているし、お互いが相手の行動を邪魔しない。

また、防災組織をつくりたいが、表の町内会はやる気がない。しかし住民は作りたいたいと思っている。そこで、両者のリーダーが密かに話し合い、裏町内会が防災組織を立ち上げても黙認すると、表の町内会長が約束したということである。

## 4.誰もが豊かに生きられる「ご近所」

50世帯ごとに助け合いの領域を設定する時、そのご近所をどのような場にするのか。これを考えてみよう。

### (1)足元のご近所で豊かさ満開になるようにしてほしい

#### ①高齢者へのアンケート結果が示唆

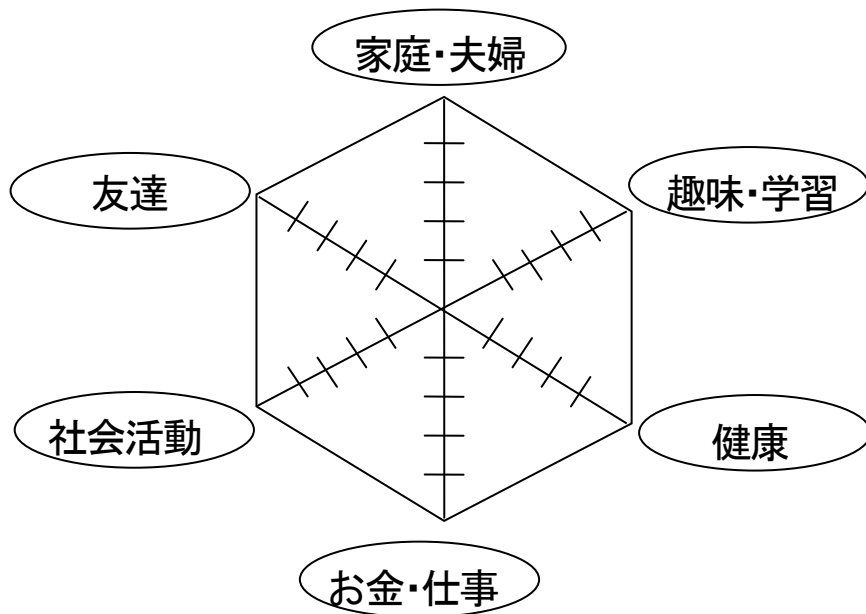
東京都からある調査結果の分析を頼まれたことがある。1,000人の高齢者へのアンケート調査だったが、私の担当は、自由回答の分析だった。たくさんの意見、要望を並べてみて、そこから敢えて何らかの結論を導き出そうとした時、見えてきたものは何か。

私共は、「豊かさダイアグラム」というものを開発し、活用している。これは、人間が豊かに生きるための6つの要件—仕事、健康、趣味、家族、ふれあい、社会活動—をダイアグラムにしたものだ。

前述の高齢者たちが共通して願っていたのは、これら6つの要素を豊かにする活動が、足元のご近所でできるようにしてほしいというものであった。

歩いて数分で働く場があり、趣味活動ができ、健康づくりもでき、ふれあいもボランティアもできる。

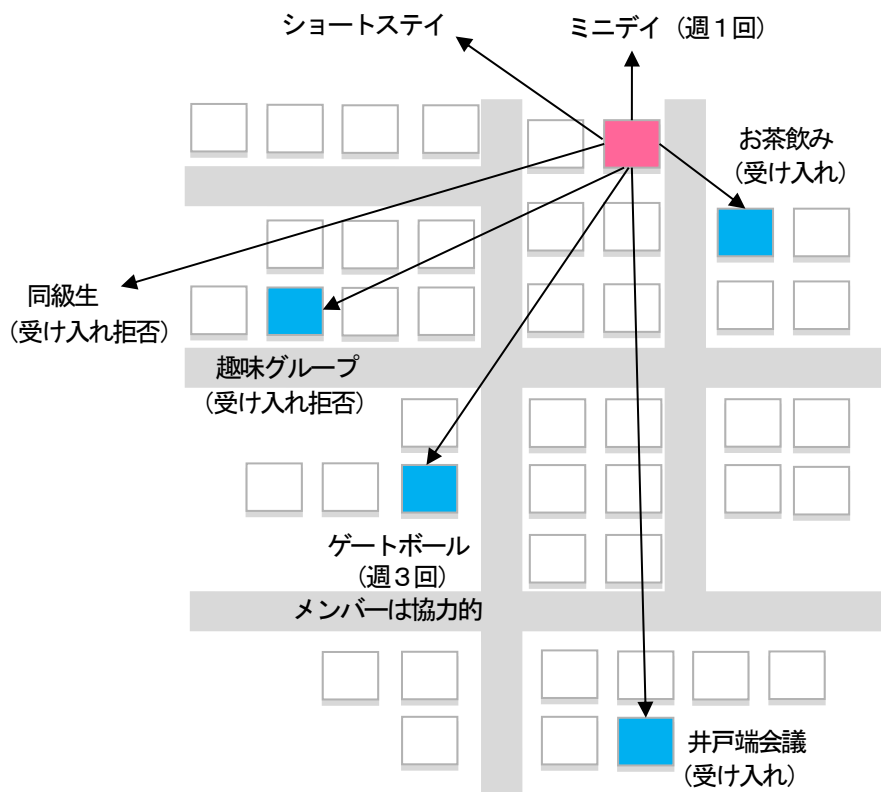
今はこれらの1つひとつを充足させるために、市の中心部などへ、車やバスに乗って行かねばならない。それを、自宅の近くでできるようにしてほしいというのだ。



## (2)要介護者も自宅にいて豊かになれる

こういう事態が誕生すれば、どういう「いいこと」が始まるだろうか。要介護者も、障害者も、足元で豊かになれるということなのだ。今は既に大介護時代に突入している。特に地方に行くと、多くの人が必要介護者という、大変な状況が生まれている。

しかし今述べたようなご近所ができれば、死ぬまで豊かな生活が、要介護でもできる。厚労省が言っている福祉の目標とは、そういうことだったはずだ。つまり、今ここで提案しているような「ご近所」をつくるのは、これからの時代を先取りするものなのだ。



## ①ご近所のあちこちに出かけて「私も入れて！」

マップを見ていただきたい。認知症の女性が、わずか30数世帯のご近所のあちこちに出かけて、「私も入れて！」と言っていた。このうちゲートボールとサロンと井戸端会議は彼女を受け入れているが、趣味グループと元同級生は「来ないで」と言っていた。もしこの全ての場が認知症の人も受け入れてくれれば、彼女はこのご近所で豊かに生きられることになる。やり方次第ではそう難しいことではない。

## ②カルチャーセンターで助け合いをしていない

しかしそれは要介護者にとってであって、元気な人は、車やバスで、スポーツセンターや公民館、カルチャーセンター、シルバー人材センターなどに行って、それで済んでしまう。その方がよほど、面倒な人間関係に巻き込まれなくていいと思うかもしれない。

しかし、例えばカルチャーセンターに行って、そこで趣味活動以外のふれあいや助け合いをしているかと言えば、やっていない。趣味活動が終わったら、皆、さっさと

帰っていく、と主宰者は嘆いていた。ただ趣味を習うためだけに来ていたのだ。それでいいのではないかと問われれば、それも一理あるが。

### (3)共に豊かになるために助け合う

もう一度、ご近所で豊かさ活動のすべてができるという案を考えてみよう。

これが実現すれば、住民は6つの豊かさへの要件を総合的に充足させるべく、ご近所内で何度も出会う。つまり「共に豊かに」なるために、ご近所内の各所で、時には切磋琢磨し、時にはアドバイスをし合う。

現在のように、市のカルチャーセンターでたまたま顔を合わせても、そこでふれあいや助け合いもしようとは思わない。目的が、ただ単にカルチャーを楽しむことなのだから。しかしご近所で共に豊かに生きようとすれば、趣味活動で出会った相手と、せっかくならふれあいも楽しもう、困り事があれば助け合おうと思うのではないか。そうすることで、効率よく豊かになれるのだから。

### (4)ご近所単位の助け合いが効果的な理由

「ご近所で共に豊かに」という方式で、ご近所単位で助け合いをすることの利点は、意外に多い。

#### ①小さな町内で日常的にふれあう。そこから助け合いが始まる

例えば、人々は今は千数百世帯の町民の1人として、個々バラバラにふれあっている。だから町内会として、助け合おうという気運が起きにくい。各自が自分の小さな町内で日常的にふれあう方が、助け合いはしやすい。

#### ②要援護者もニーズを発信しやすくなる

しかもご近所なら、その輪の中に要援護者も加わってくる。その人たちから、さまざまなニーズが発信される。

ご近所の中に趣味などのグループができることで、要援護者もそれに参加できるようになる。そして、同じグループの仲間に悩みを吐露し、それに誰かが対応するはずである。つまりこの仕組みで、福祉ニーズと資源がグッと近づき、接触する。接点にいる人の誰かが対応する。こうして、助け合いが始まるのだ。

### ③要援護者の自助力が高まれば、自分で資源を確保できる

ご近所では当事者が主導権を取るのが普通になっているが、助けられ上手な人はまだ多くない。当事者の自助力を磨いて強めれば、ご近所という小さな世界で、しかもこれまで市域などで活躍していたたくさんの人材がご近所に戻ってくるのだから、要援護者の腕次第でいくらでも資源は確保できる。先に紹介した認知症の女性のように。

### ④世話焼きさんも活動しやすくなる

世話焼きさんは、50世帯の町内でニーズを探している。見つけたら即刻関わる気である。ところが今はその活動対象となる要援護者が、デイサービスなどを受けるために町全体に出てしまっている。または行ける場所がなく、家に閉じこもりがちになっている。しかし要援護者の足元に生きがいの対象(グループ)がたくさんできれば、そこに参加でき、そこで世話焼きさんと出会う可能性が高くなる。世話焼きさんからすれば、支援の必要な人と出会う機会が多くなり、はりきって関わってくれるだろう。

結局のところ、要援護者の困りごとに関わるのは、世話焼きさんなのだ。世話焼きさんは、相手の困り事を敏感に察知し、素早く関わる。だから世話焼きさんが活動しやすい環境、ニーズを把握しやすい環境を整えてあげれば、誰に頼まれるでもなく、活動してくれる。地域にどんな福祉ニーズがあるかなどと調査する必要はあまりない。世話焼きさんのアンテナが働きやすくしてあげれば、ニーズを見つけ、対応してくれる。

## ⑤要援護者が最も望んでいる「その人らしく」にも対応

福祉ニーズといっても、例えば見守りなどは、じつは当事者からすればそれほど重要ではない。見守り自体が本人に大きな福祉効果を与えるということはない。逆に、要援護者本人が最も望んでいるのは、「自分らしく生きたい」。自己実現欲求である。要介護になっても畑仕事をやりたい。こうしたニーズが無視されるのが今の社会である。

だが福祉活動のみならず、住民の様々な趣味活動もご近所に戻ってくれば、このニーズが充足される。あとはメンバーが要援護者を受け入れるかどうか、である。それができれば、最も望まれているニーズが充足されることになる。

## (5)豊かな生活ができるご近所をどうつくるか

理想はそうだとし、ではこのようなご近所をどうやって実現させるのか。いくつかの方法がある。

### ①今まで町内圏域でやっていたことー趣味やふれあい、助け合い（サービス）、健康づくりなどを、これからはご近所単位にする。

具体的には、参加者のリーダー格の人が、各自ご近所に戻って、いわば二次会を開く。カルチャーセンターをご近所毎につくるのではなく、同じようにして、センターで活躍している人が、ご近所に戻って二次会的な教室を開くのだ。自宅で細々とやっている形でいい。

### ②もともとご近所にあった、似たような営みを掘り起こし、それを若干充実させる。

サロンなら、すでに井戸端会議が各所で開かれている。それを探し出し、不足している部分があれば支援するなど、少しだけ「色をつける」程度でいい。

### ③新たにそれぞれの営みのご近所版をつくる。

北海道のある地域で、町内圏域でラジオ体操をやっていたが、冬は集合場所に集まるのが大変だから休止しようということになった。しかし体操は、細々とでもいいから続ける必要がある。そこでリーダー格の人や小リーダーなどが、それぞれのご近所で立ち上げたらどうかと言ったら、すでにリーダーの1人は足元で仲間を集めてやっていた。その隣でも同じことが行われていた。

### ④老人会や子ども会などは、ご近所単位のクラブをつくる。

今は町内ごとに作られているが、これをさらに細かく分ける。

### ⑤町内のイベントもご近所単位に実施する。

敬老会や成人式など、町の主だったイベントもご近所単位に実施するようにする。こうすれば、要介護の人も敬老会に参加できる。今は市の全域から高齢者を集めて敬老会を開くので、要介護者などは参加できないし、実際に参加することを、主催者は想定していない。

### ⑥ボランティアも、ご近所版をつくる。

市に1つあったものをご近所ごとに分解する。各自が居住するご近所で立ち上げる。

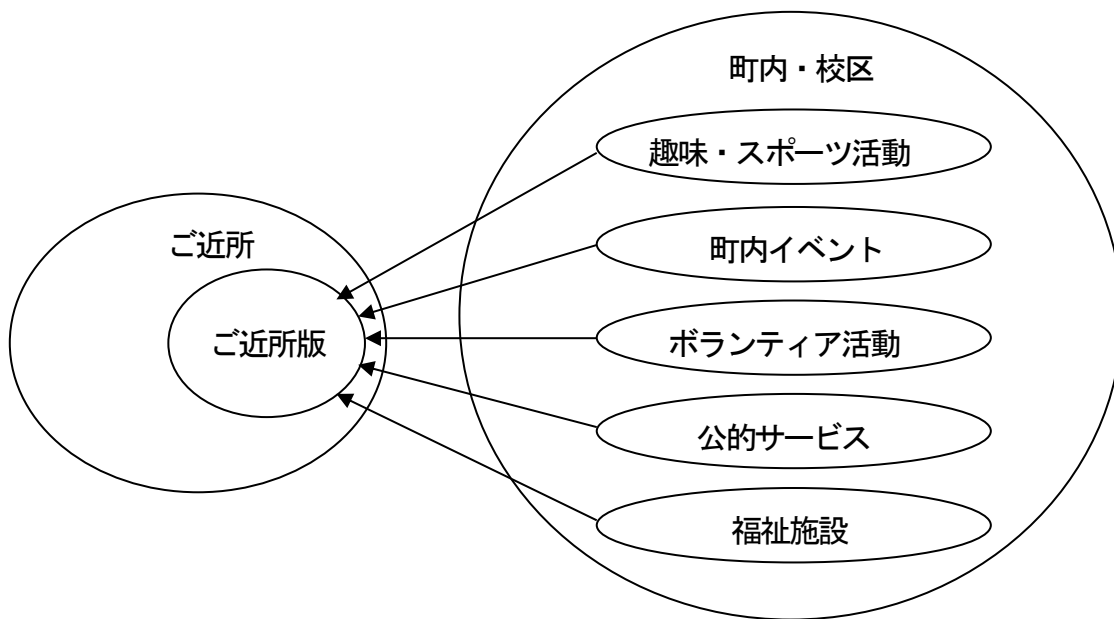
### ⑦公的サービスも、ご近所毎にサービス拠点を設ける。

いちいち市の福祉センターに行かなくてもいいようにする。介護予防教室のようなものも、ご近所ごとに開く。講師やスタッフは各ご近所から調達する。

### ⑧福祉施設もできればご近所毎につくる。

それが無理ならば、施設を分解して、その1つひとつをご近所につくる。対象者の自宅をランチにしてもいい。スタッフは各ご近所の中から発掘する。





## (6)要介護者も豊かさの仲間に加えてこそ

### ①ご近所単位に変えるのは、要援護者も仲間に加えるため

わざわざご近所単位に変えるのは、まずもって要援護者もそれらの組織や活動に参加できるようにするためである。

介護保険が始まって以来だと思うが、住民は要援護者を仲間に入れることを敬遠するようになった。要援護になったらサービスのお世話になればいい、私たちのグループに来て迷惑をかけないでほしいと。地域では、元気な人と弱った人が棲み分けをするようになった。

### ②共生社会づくりは要援護者を仲間に入れることから

今、国を挙げてめざしているのが「共生社会」作りであるが、現実はその反対の方に向かっている。共生社会を今、実践するとしたら、まずは要援護者を仲間に加えることである。たしかに認知症の人が1人加わると、メンバーが困惑するようなことが起き、これまでのようには物事がスムーズに進まない。「こんな人を入れるからだ」という愚痴が出てくる。それでも我慢して、その人と折り合っていく。それを助け合

いというのではないか。

## **(7)要援護者を仲間に迎え入れるために**

と言っても、要援護者を排除したいという気風が、すぐになくなるとは思われない。具体的な方策を考えなければならない。

### **①デイサービスセンターや施設が利用者のグループ参加を働きかける**

要介護者の少なからずが、デイサービスを利用したり、施設に入所している。その時に、今までやっていた趣味活動をあきらめて、グループから脱退してしまうが、そうではなく、彼らが地域グループに参加し続けることができるように、デイサービスセンターや施設が、移送や介助を引き受けるなどして、グループを説得していく。

福祉の理想がレベルアップした今、里帰りは地域全体の課題になっていい。しかしそれを家族だけに負わせるのは酷というものだ。ご近所の人たちで迎えてあげる必要がある。

13ページのマップは、デイサービスを利用している人の、自宅にいるときの活動である。2人が畑を楽しんでいる。それを支援している人が2人いた。こういうやり方をデイサービスセンターが働きかけるといい。それに、夫が妻（デイサービスを利用している）の畑を応援しているケースも2件ある。

### **②グループも要介護者を退会させずに、活動を続けられるようにする**

要介護でもできる方法を考えてあげる、移送（相乗り）をしてあげる、介助人を付けるなど。

### **③ご近所に、要介護者を仲間入りさせるための特別な人材も必要だ**

私は「入れさせ屋さん」と呼んでいるが、そういう口利きの上手な人がいる。「私も一緒に入るから、この方を入れてあげてね」という方法や、「介助人付き」で入れても

らうという方法をとっている人もいる。また、リーダー級の人が半ば強引に入れてしまったり、認知症などの本人が堂々と（こちら半ば強引に）入っていくことでうまくいったケースもある。

#### **④老々世帯は夫婦共に元気なうちに地域グループに2人一緒に参加するよう働きかける**

老々世帯が多い町内会もあるが、今のところ2人とも元気だということで、何もしていない。しかしその後、妻が要介護になり、夫が介護することになると、妻とともに閉じこもってしまうため、地域の人が入れなくなる。状況が悪化すれば、介護殺人も起こり得る。そこで、夫婦共に元気なうちに、2人一緒に地域グループに参加するよう働きかける必要がある。

#### **⑤要援護者が豊かさづくりの輪に入るには、ご近所において、日常的に要援護者を支える人材も必要だ**

ご近所（町内会）ごとに数名の介護人材がいるはずだ。元看護師や保健師、ヘルパー、介護福祉士など。そして、家庭介護経験者も同じぐらいいる。

## 5.スモール活動のあり方

ご近所では人々は独特の活動パターンで行動している。それを頭に入れて進めていかなければ、うまくいかない。数百世帯の人口を抱えた町内会での福祉活動と同じやり方ではいけないのだ。

### ①活動のリーダーシップは天性主義で

支え合いマップ作りをすると、それぞれの町内会ごとに世話焼きさんが活躍している。大型、中型、小型の世話焼きさんが、それぞれのスケールで活動している。町内会活動のリーダーシップをとってもらうのに適しているのは、その中の大型と中型の世話焼きさんだ。

11ページのマップを見ていただきたい。中心部で、自宅を開放してサロンを開いている人が2人いる。特に上の人は女性で、このご近所の人々のふれあいや助け合いのほとんどを知っていた。このご近所は、この人を中心にして助け合えばいいと、すぐにわかる。

福祉は、困った人を助けてなんぼの世界である。人を助けたいという意気込みも力量もない人をトップに据えれば、助け合いは絶対にうまくいかない。リーダーの要件はなによりもまず、人を実際に助けている人でなければならない。天性の資質(実力)を持つ人を抜擢しよう。

### ②システムを作らない。個々の活動が阿吽の呼吸で連携する

ご近所の活動は、町内会全域で統一的にやっているわけではない。どちらかといえば、個々バラバラに助け合いが行われている。それが基本で、それらが何となくネットワークしているのがご近所活動の特徴なのだ。それを敢えて、特定のシステムの中に組み込んでしまおうとすればうまくいかない。個々の活動、助け合いを大事にしつつ、それらがうまく「阿吽の呼吸で」連携するように仕掛けることが大事である。

### ③マップで浮かび上がった助け合いを下地に

町内会活動を推進するということは、勝手にリーダーたちで活動を考え出すというものではない。支え合いマップで浮かび上がってきたそのご近所の助け合いの実態を基に、それがより効果的な活動になるよう、若干、手を加える程度でいい。だから、町内会活動はすべてマップ作りから始めることになる。

### ④助け合いだから双方向、個人的活動だから一対一で

ご近所で、人々は生活を営んでいる。だからここでは、「サービス」という発想はいけない。あくまで助け合いだから、一方的なサービスは嫌われる。すべては双方向だ。また、個人的、私的な営みだから、相手を何人かまとめたり、十把一からげに扱ってはいけない。あくまで相性の合う人同士での一対一の助け合いなのだ。マップを作ると、こうした原則がどこでも貫かれているのに気付くはずである。

### ⑤ご近所の福祉推進はご近所の世話焼きさんたちで

ご近所の福祉を進めていくのは、誰か。町内会組織や民生委員、あるいは社会福祉協議会や地域包括支援センターなどだと思われている。だからそれらの関係者が住民に相談することもなく、勝手に進めることが当たり前になっているし、ご近所の問題を上層圏域に持って行ってしまおうのだが、そうではなく、基本はご近所の問題はご近所の人たちで解決に取り組み、ご近所福祉を進めてもらうべきである。関係者が住民と一緒に取り組む、後方支援をする、たまには見本として試しにやって見せる、ということはあるけれども、基本は変わらない。

## 6. ご近所の推進体制もスモール化

住民の基本的な福祉活動の場・助け合いの場を数百世帯の町内からご近所へ移行するだけでなく、その推進体制もスモール化する必要がある。

### (1) 従来の町内圏域をご近所支援の場に

今は数万世帯の市域から指揮しているが、これでは丁寧なご近所支援はできない。従来の町内圏域をご近所支援の場にすべきである。中心は民生委員になるが、この役割に応えられる人材を発掘する必要がある。民生委員には荷が重ければ、超大型の世話焼きさんを探すことだ。

#### ① 民生委員と町内会長が連携して実施

次に紹介するのは、民生委員が、自身が居住しているご近所町内会（44世帯）の推進を、町内会長と一緒に実行した事例である。以下のようなことをわずか1年でやってしまった。これでわかることは、第3層の優秀な民生委員が、自分の生活するご近所にも関わると、こんなにも見事な活動ができるということである。

活動の特徴を挙げると、

①この事例では、活動に必要な人材や場所、モノの大部分をご近所内から調達している。ご近所内の資源調達にこだわるのが、結果として助け合いの仕掛けにつながるのだ。

②また、ご近所内というのは資源を調達しやすいこともわかる。同じご近所の住人という意識があるから、相手の協力を得られやすい。

③上層の関係機関に働きかける場合も、ご近所の関係者を通せば有利になる。

## ①カーブミラーの設置

- ①町内会の話し合いで、事故の多い交差点を確認
- ②その通り沿いに子どもが数名住んでおり、カーブミラーの購入を決定
- ③町内の警察勤務の人に協力を依頼。設置許可の手続きと設置を

## ②防災倉庫の設置

- ①防災活動を進めるうえで、防災倉庫が必要となった
- ②町民の敷地を使用させてもらえるよう依頼
- ③市への届け出書類の作成を、町内会員の土地家屋調査士に依頼
- ④防災倉庫の設置経費に市の補助金が活用できることに
- ⑤町内会員の元大工に、防災倉庫の設置作業を依頼

## ③「いきいき体操」を町内で実施

- ①町内にいきいき体操の会場がなく、地区外へ行ける人のみが参加していた
- ②町内会員の一人暮らし高齢者に、自宅で体操をさせてほしいと依頼
- ③週に2回、個人宅で体操を実施。これで参加者が3人から9人に

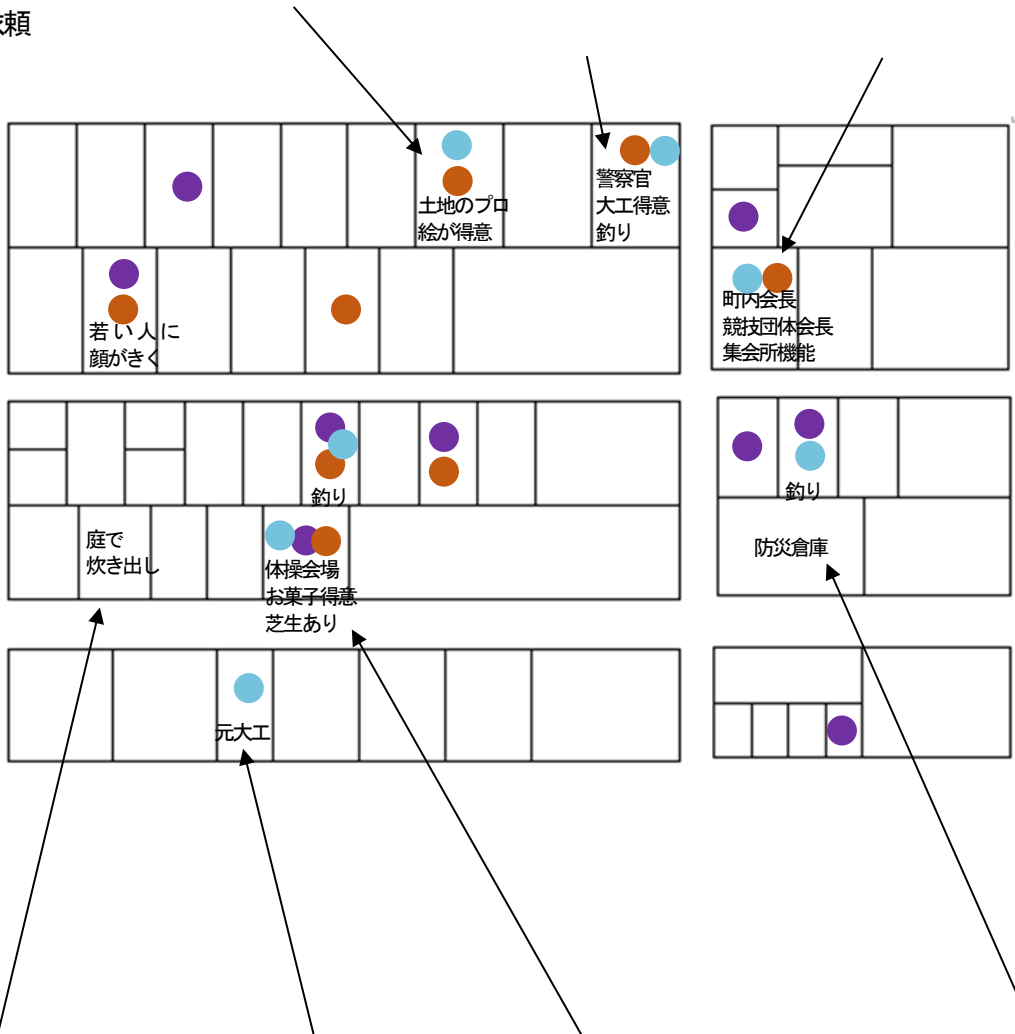
## ④どぶ掃除

- ①高齢者が多く、側溝の蓋を上げてのどぶ掃除は負担が大きいとの声が出た
- ②町内会長がスポーツ団体の役員で、会員の高校生、大学生に掃除の協力を依頼

市への防災倉庫の届け出書類の作成をご近所内の土地家屋調査士に依頼

警察勤務の人にカーブミラーの設置許可の手続きと設置を依頼

町内会長がスポーツ団体の役員で、会員の高校生、大学生にドブ掃除を依頼



ドブ掃除協力の学生へのお礼に、この家の庭で炊き出し

元大工に、防災倉庫の設置作業を依頼

一人暮らし高齢者宅を体操会場に

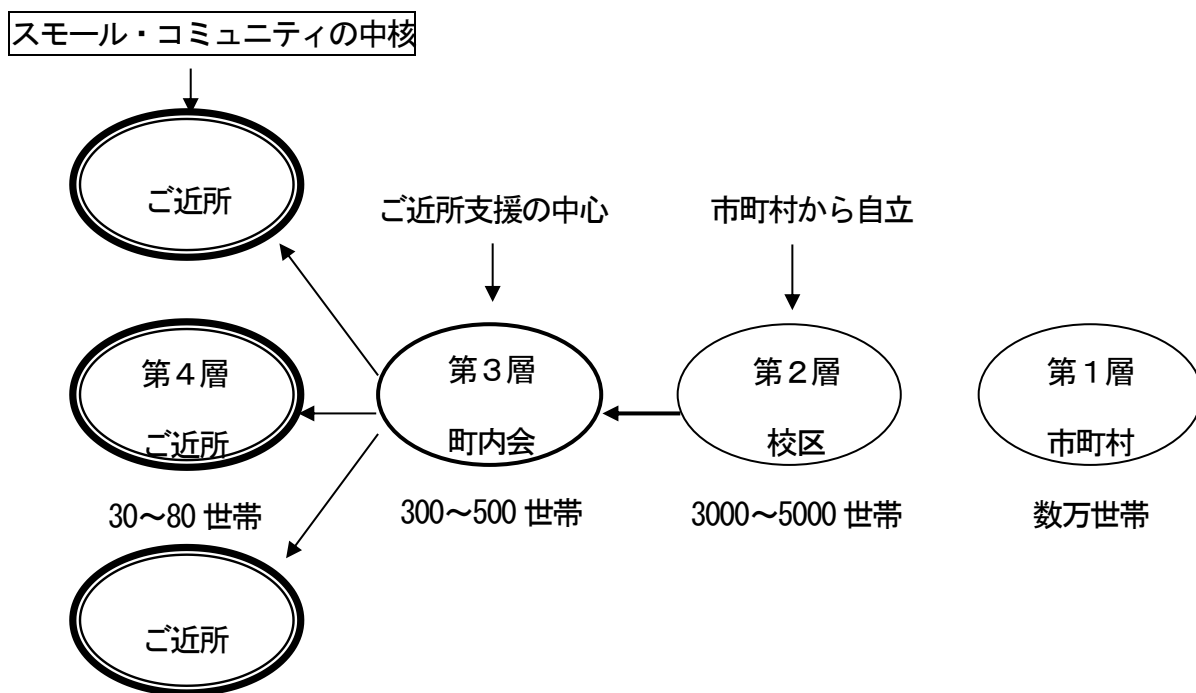
町民の敷地に防災倉庫を建てさせてもらう



## (2)推進体制のつくり方

### ①町内を50世帯程度ごとに分割する

まずやるべきは、町内を50世帯程度ごとに区切ることだ。300世帯の町内とすれば、大体6つに分割する。別に50にこだわる必要はない。住民と話し合えば、この辺りからこの辺りまでが、住民がまとまっている、といったことが出てくる。大きな道路や川で分かれていたり、1班と2班はまとまっているとか。支え合いマップ作りをすると、そのご近所がどこからどこまでか、見えてくる。



### ②直近の推進（支援）体である自治体に専従スタッフを

ご近所の助け合いを直接支援するのは、自治体である。これまでは町内会や民生委員が自分たちで福祉活動をやっているが、それを切り替える。できる限りご近所に活動を移していき、自分たちは支援役に回る。支援役だから楽になるというわけではなく、自分たちで活動するよりもむしろ、大変な役割と言える。

自治会長が、行政からの補助金で活動している場合が多いが、それとは別に、ご近

所支援を中心とした福祉活動を実行する人材や組織を設ける必要がある。彼等に対しても若干の手当の支給が必要だ。(あくまで参考までに、世話焼きさん数名に聞いてみたところ、月額3万円なら、というのが平均的な数字だった。) 自治区や校区の手当のあり方も、独自の方式を採用するのがいい。

### ③各地区（校区）組織が独立へ

数十万という巨大な市では身動きができない。校区社協あたりが、これからは中心になって、管下の町内、ご近所への指導・支援によって、実質的に地域福祉を進めるのがいい。それぞれの校区社協が自立し、有給スタッフを確保して、独立制を進めるのが好ましい。要は小さな社協が、校区の数だけ誕生したと思えばいい。

これらが無償のボランティアだけでできると思っている人も少なくないが、そういうものではない。

## 7. 「スモール感覚」を磨こう

今の関係者は、スモールという感覚を持つ以前に、地域や活動の規模について、ほとんど意識していないように思える。最も基礎的な知識である、地域は4つの圏域からできているということも、ほとんど考えずに行動している人もいる。町内会活動の人たちも、地区社協のリーダーたちも、ただ漠然と「地域」というイメージを持っているだけなので、市域で活動しているのと変わらない感覚で地区活動をしている。

そこで今、本書が主張している「スモール」という感覚を身に付けるために必要なことを挙げてみよう。

### ①あくまで当事者が主役であること

ここがしっかり頭に入っていれば、活動の中心は自然とご近所になるはずだ。当事者はそこにいて、遠くまで行くことが困難だからだ。その当事者のことを常に第一に考えていけば、当事者がいるご近所という所が、どんなに小さくても、自分たちが関与すべき場所であると割り切れるはずである。当事者の行動半径の小ささを、しっかり頭に入れておく必要がある。

### ②マップ作りをすれば、ご近所が現場だと納得できる

とにかく支え合いマップ作りをしてみれば、人々はその小さな場所でふれあい、助け合っているのだということがよく分かる。福祉とはこんな小さな場所での、ささやかな活動なのだとして理解できるはずである。福祉に限っては、スケールの大きさを期待してはいけないのだ。数百世帯の町内圏域で行動するのに慣れると、そのことを忘れてしまう。

### ③サッカーのフォーメーションをイメージすれば

関係者は、地域が4つの圏域からできていることを常に頭に置いておく必要がある。

自分はその中のどこにいて、基本的にそこで活動すべきだということを意識することが大事だ。サッカーのフォーメーションをイメージするとわかりやすい。広いピッチの中を選手みんながバラバラに、または団子になって走り回っても、うまくいかない。町内圏域にいる人は、フォワードをバックアップするのが基本的な役割だと認識することで、そこからいろいろな活動形態が生まれてくるのだ。

#### ④移送サービスに惑わされない

地域は市町村域一つで十分だと割り切っている人も少なくない。遠ければ移送サービスがあるではないか、と。しかし移送サービスというのは、私たちの地域感覚を奪う。遠くへ運ばれるほど、感覚は希薄になる。自分で歩いて動き回ることで、地域という感覚が得られる。ふれあいや助け合いができる範囲の小ささも理解できる。移送というやり方に慣れると、地域は無限大に広がり、スモール感覚を忘れてしまう。

#### ⑤人を呼び寄せることが当たり前になると…

推進者主導、担い手主導の意識があると、推進者が中心にいて（福祉センターに常駐して）、住民がこっちへ来ればいいと思ってしまう。その人がどこから来るのか、どんなに苦労してやって来るかといったことに無頓着になる。これによってもスモール感覚は失われる。

#### ⑥自分の足でご近所を歩こう。校区を歩いてみよう

一度自分の足で、ご近所の隅から隅まで歩いてみよう。この中で人々がふれあい、助け合っているのだということがわかる。どれぐらいの範囲なら、見守りができ、助け合いができるのか、その感覚が分かってくるのではないかな。

さらに、数千世帯の地区（校区）を歩いてみたら、この広さで何ができるか、何ができないかがわかるはずだ。ここが「顔が見える」範囲ではないこともすぐ理解されるだろう。

## 8.50 世帯の町内会を持つ地区から始める

本書で提案していることは、市町の世帯が数万で、校区自体が数千、町内会が数百という、一般的な地域ではなかなかむずかしい。まず50世帯のご近所を抽出することから始めなければならない。

10ページで紹介したご近所町内会は、数万世帯の市の中にある。必ずしも村である必要はないのだ。

### 支え合いマップ作りから

そこでまず支え合いマップ作りをする。住民のふれあいや助け合いの実態が浮き彫りになる。ご近所を取りまとめられる人材—世話焼きさんがいるかが大事なポイントになる。

既に述べたように、わずか50世帯の小さなコミュニティなのだから、大型世話焼きさんが1人いれば、ある程度の福祉ができてしまう。この辺りから始めると、スムーズに進んでいく。

---

## 住民流福祉総合研究所

**木原孝久**

〒350-0451

埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷1-4-76-1

TEL049-294-8284

kiharas@msh.biglobe.ne.jp

<http://juminryu.web.fc2.com/>

---